

展示会 —現場サイドから—

横山 卓雄¹⁾

科学展示会の小委員長は2人であり、筆者は主として現場の運営にあたったので、その点についての話題にしぼって報告したい。

1. 皇太子殿下の御来訪について

7月になって、皇太子殿下の科学展示会御訪問が決まった。これは御本人の希望によるものであり、約45分間展示を見てまわられることになった。

今回の訪洛予定等の責任をもっている宮内庁と京都府のほうから、いろいろな希望がよせられた。

まず、巡覧コースの決定からはじまった。70を越える展示ブースのうちから約10ブースを選び、それを巡回するコースを決めねばならない。しかも、予定時間を厳格に守ってほしいとの希望が強い。さらに当日殿下が展示会場においでになる間は、一般見学者の入場を遠慮してもらい、かつ全ブース関係者の氏名と人数を届けることになった。殿下がたちよられるブースの責任者には、一応御説明のできる人の配置を依頼しておく必要もあったが、警備の点を配慮して、前もってコースや訪問予定ブースは公開しないことになっていた。



写真2 皇太子殿下にテーマ展示を御説明申し上げる横山。

そこで、以下に示したような文書を展示ブースの責任者に対して送付した。

『万国地質学会議の科学展示会に協力していただき、有難うございます。さて、準備についての詳細は、フジヤとの打ち合せを進めておられると推察しますが、展示委員会として、以下の事をお願いします。

1. すでにお聞きになっているかも知れませんが、8月24日には皇太子殿下が展示会場においでになります。それにあたって、警備関係者から次のような通達および要望が来ています。

- 1) 科学展示会の一般公開は、8月24日、午後3時からとすること
- 2) 準備は、当日の午前11時までに終了すること、その後は駐車場から車両を退去すること。〈その後も駐車したい場合は、車両番号、所属、運転手名を届ける必要がある。〉
- 3) 午前11時から午後1時までは、警備当局による検索(危険物捜し)が徹底的に行われることを承知ください
- 4) 上記の2時間と、午後3時までは、展示場に



写真1 科学展示会々場。メインの会場から写す。

1) 同志社大学工学部；科学展示委員長：
〒602 京都府京都市上京区今出川通烏丸

キーワード：万国地質学会議，科学展示小委員会，科学展示会，皇太子殿下，保税，ブックショップ，スーパーマーケット，テーマ展示，標本展示

は届けが済んでいる関係者のみしか入らないこと。<届けられた方々には、展示委員会から名札を渡しますので、それを着用してください>

5) 午後2時から3時までは、皇太子殿下にたいして展示内容を説明できるような要員を、展示ブースに配置して下さい。

ただし、後半期のみ展示を出展する場合は、以上のことは関係がありません。——以下略——』

この結果、事務的にいろいろな混乱を引き起こした。出展者には、氏名を届けかつ名札をつけることが義務のように理解されたようで皇太子殿下の展示会巡覧が終わった2日目からは、現実には意味を失った展示現場管理、とくに展示ブース関係者の氏名登録や名札作成事務のために、展示終了時に至るまで若干の労力をさかれることになった。しかし、展示ブース関係者の御協力があって、これらの特別業務がスムーズにできたことは、現場責任者として感謝している。

当日は、約3分遅れて皇太子殿下が到着した。IGC・スーベニア・ショップ、IGC主催標本即売店を皮切りに、国内展示ブース6カ所、外国展示ブース3カ所を案内し、説明をしたが、皇太子殿下は非常に興味をもたれたようであった。後日(翌年正月12日)東宮御所で行われたお茶会の席でどこに興味をもたれたかの感想をお聞きしたところ、すべてが興味深かったというお答えであった。

展示ブースの巡回がおわって最後にテーマ展示の前にかざられていた岩石・鉱物サンプルをご覧になった。メノウや黒曜石、水晶などが、とくに気に入られたようである。ここで数分歓談し、時間も予定通りに科学展示会の巡覧が終了した。無事終了したこともほっとしたことだが、皇太子殿下の科学展示会訪問は、テレビ等にも報道され地質学分野にとっては、非常に意味があったと思っている。

2. 準備段階から当日まで

現場サイドでおもに行った準備は、保税許可、IGC主催の各ブース(Book Shop, おみやげ物即売ブース、日本産標本即売ブースの準備)とテーマ展示の作成および休息所の設置、運営といつてよい。

以下にそれぞれについて述べる。

1) 保税許可について

科学展示会に出展する外国の物品は、そのまま日本国内に持ち込むと関税を支払わねばならない。そこで、持ち帰ることを条件に関税を免除される保税処置を大阪税関にお願いすることになった。このときの申請者は、人格(個人か法人)をもっていなければならないので、将来解散することが確実なIGC組織委員会は申請者となることができない。日本地質学会も法人格をもっていないので、東京地学協会にお願いした。ただ申請書にはたくさんの添付書類を必要とする。財団設立許可証、昨年度の予算及び決算書、役員名簿、責任者履歴書などである。こうした書類の作成等について、東京地学協会には、迷惑のかけどうしであった。また、保税許可書の交付時には申請法人の責任者本人が大阪港の大阪税関まで出頭するよにという要請があった。しかし、交付日には、大阪の地質調査所地域センター長の佃さんに、申請者を代表する代理人として出向いていただくことで、なんとか許可証を交付してもらうことができた。外国からの展示は、結局11カ国20団体であった。

展示会場での保税に関する義務は、保税展示会であることを公示することと、大阪税関の係員が巡視にくる場合の案内を行うことであった。ともに無事に終了した。

終了後、展示物は本来本国に返送しなければならないが、南アフリカ連邦共和国は、科学展示会で展示したものを、終了後東京の大使館のロビーに展示するために日本国内に残した。これは外交特権で当然無関税であった。それ以外の国々の展示物は保税処置によってすべてスムーズに返送された。なお、保守及び物品の輸入・輸出に関するすべての書類の作成や通関・運送の手配などは、(株)KBSインターナショナルに依頼した。

2) IGC 科学展示委員会主催ブックショップ

大会開催がせまってきた春ごろからのことである。諸団体から書籍等の依託販売の希望が多くよせられるようになった。いろいろ問題もあり、仕事量も増大するので、実施を躊躇していたが、希望が多いので、4月の執行委員会にブックショップ設置の提案を行ったところ、若干の異論がでた。そのおもなものは、展示ブースを確保している団体との間に不公平が生じることであった。それでしばらくは保留していたが、やはり要望が多い。また、単なる金



写真3 科学展示会々場のテーマ展示.



写真4 科学展示会々場の休息コーナー。古生物のアンモナイトをかたどった月餅と三葉虫形の干菓子が用意された。

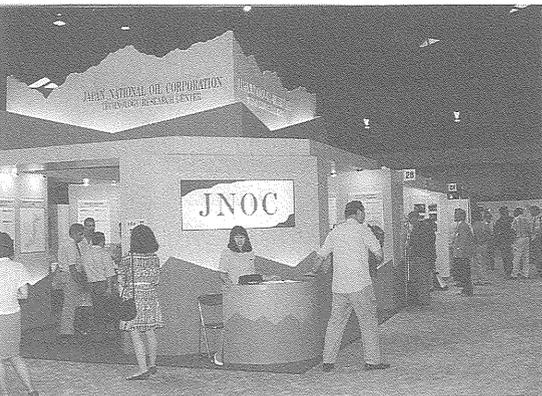


写真5 科学展示会々場の風景。石油公団のブース。

銭的な問題だけで、価値の認められる書籍の展示・販売を不可能にするのもどうも納得いかない。そこでできるだけ不公平をなくするという考えを考えながら、ブックショップを開催することにして、

詳細は現場サイドに一任してもらおうという条件で、6月の執行委員会に提案し開催を承認していただいた。

もう会議の初日も迫っていたので、早速各団体、各出版社に以下のような趣旨の書類を送付した。この場合、販売業者は除外した。

『すでにご承知のように、今夏8月24日～9月3日に万国地質学会議(IGC)が京都国立会館で開催されます。この機会に展示会が開催されることは、よくご承知のことと存じます。

6月末日に展示についての最終計画をまとめましたが、現在でも前半に数個、後半に5～6個のブースが残っています。このブースを用い、展示委員会として、書籍、資料等の販売を行うことを計画しました。

しかし、諸学会の中には、苦しい財政の中でブースを確保されたところもあります。このように協力をさせていただいた学会に対して、不平等になってはいけなと考えて、次のような原則を作成しました。

(1) 通期でブースを確保されている学会等に対しては、展示委員会のブースにおいても販売を可能とする。(無料)

(2) 半期(前半あるいは後半)にブースを確保しておられる学会等については、ブースを確保していない半期については委員会のブースで販売を引き受けることにするが、売り上げの1割を納めていただくことを原則とする。

(3) ブースを確保していない学会、諸団体については、販売を委員会が引き受けるが、若干の権利金および売り上げの3割を納めていただくことを原則とする。

(注1)権利金については団体名を表示する場合は数万円、表示しない場合は無料とする。前者の場合は、棚一つを提供する。

(注2)委員会のブースにおいては、販売員は委員会で確保するので、依頼者からの販売員は不要である。

展示委員会委員長 鞠子正・横山卓雄』

結果として19団体から参加の申し込みがあり、科学展示場の一つのコーナーにおいてブックショッ

ブを開くことができた。このブックショップの実際の運営は(株)京都自然史研究所に依託した。

当日になって中国・ソ連など外国からの販売依託もあり、かつ無料配布の資料・雑誌類の扱所としても利用してもらった。また、IGC ポスターの配布所ともなって、盛況であった。売上げ総額は180万円を越えた。

ただ、いわゆる“万引き”もけっこう多かったのも事実である。一つには無料配布物とまちがえたとも考えられる。また、人件費を考えて、開棚式のスーパー・マーケット方式を採用したこともそれを助長したかも知れない。レジを扱った女性担当者によれば、あきらかに“万引き”とわかって、外国人である場合なかなか追いかけて代金を請求することができなかったそうである。決算によれば、紛失した書籍の総金額は約7万円に達する。

いろいろ問題はあろうが、総体として考えれば、ブックショップ開催は成功であったように思う。

3) スーベニア・ショップ

IGC 事務局主催の展示ブースとして、スーベニア・ショップが開催された。この準備はすべて、筑波のIGC事務局によって行われたので、ここでは、当日の様子をスケッチ風にまとめておきたい。

このブースはともかくも大忙がしであった。販売品に小物が多く、小銭を扱う上にもかくも客が大人数である。記念切手などは、自国へ送る絵ハガキにも利用されるので1~数枚を扱わねばならない。販売担当者は休息なし、昼食も交替で食べるという具合で、見ていて気の毒なほどであった。

T シャツ、日本手ぬぐい、タイピン、ワッペン、絵ハガキ、時計など、いろいろなものが売られていた。総売り上げは400万円を越えている。日毎に行わねばならない展示場閉鎖後の会計計算も大変であった。

このスーベニア・ショップでの問題は、途中からIGC ポスターの配布場所になったことであった。ただでさえ大量の買い物客でにぎわっているところに、無料配布を受けようとポスターをとりにくるので、混乱をきわめた。ポスターを丸めて渡す手間も大変である。展示会場責任者としては、みかねてポスター配布場所をやや忙しきの少ないブックショップのレジに変更してもらおう手配した。この問題は、本部が現場の状況を把握しないままに、配布場

所を会場に公告したことにあり、大会本部としても反省すべきであろう。

4) 科学展示委員会主催日本産標本即売ブース

展示会の準備も大づめになって、展示ブースの出席者がほぼ決定したころ、出展者リストをみていると日本産岩石・鉱物標本の展示されているところが少ないことに気がついた。外国の参加者にとっては、標本展示がないのは淋しいのではないかと考え、標本業者に出展を依頼した。関西を中心に関東を含めて、依頼をしたのだが、ともかくもブース代が高いので一社を除いて不可能だとのことである。そこで、展示委員会主催ということでブース代を割り引いた。

幸いにも京都の業者である大江理工社、ぎおん石、日本地科学社が趣旨に賛同していただき、三つのブースで日本産各種標本の展示を行うことができた。

とくに「ぎおん石」については、テーマ展示用の大型標本を無料でかしていただいたので、深く感謝している。この標本は前述したように皇太子殿下に興味をもっていただき、話に花がさいたこともあり、有意義であったと思う。

5) テーマ展示について

展示会場のレイアウトを考える上で問題となったことは、テーマ展示をどうするか、休息所をどのように設置するか、参加者が自由に張ることのできるポスター用ボードをどこにどの程度設置するかなどであった。

会場の入り口にテーマを表現するオブジェを置いたのだが、このテーマ展示はいろいろな意味で作成した意義があったと思う。

テーマ展示物を作成するにあたって、筆者の友人である株式会社ディックの河崎稔夫さんにデザインを依頼した。また資金的には、制作費の一部に対して株式会社ドリコの援助を受けた。この点もここで感謝の意を表しておきたい。計画段階では、イルミネーション案も含む5つの案が河崎さんから示されたが、作成費用なども考えて、白いオブジェにテーマとして「地球環境を考える、人間は生き残れるか」の文字を示し、まわりに鉱物、岩石標本を配置するものに決めさせていただいた。デザイン代金は、世間的にみればスズメの涙ほどであるが、筆者の友人であるためにそれで許していただいた。

このテーマ展示は、大会参加者にとってかっこう

の記念写真撮影場所を提供することになったようである。大会中いつもここで記念撮影する風景をみるのができた。

6) 休息所

展示会場に色彩りをそえる意味と参加者にゆったりとくつろいでいただく目的で、会場のほぼ中央に日本式庭園風の休息所を設置した。竹垣に緋毛織の床几を配置したものであった。休息時のリラクスのために、水とウーロン茶のサービスおよび抹茶を用意した。抹茶は無料サービスするつもりであったが、二階にある喫茶店の営業妨害になることを配慮する必要があり、一応200円をいただくことにした。

筆者の友人である久保田睦子さんが、万事とりしきってくれた。着物姿の人たちが接待をしてくれたので、外国からの参加者に喜ばれ写真のモデルにさそわれるなど、ほほえましい風景をうみだしたといつてよい。抹茶の用意のために会場につめてくれた数人のご婦人たちにも感謝の意を表したい。

3. IGC 開催中のハプニング

会議開催中の科学展示会は、特に大きな事故もなく無事に終わったといつてよい。ただ、準備段階で予想されていなかった小さなハプニングが少なからず起こった。それらを紹介しておく。

1) 満員の休息所

休息所は、緋毛織のかけられた8個の床几と小さな日本風庭園、無料の湯茶および200円の抹茶で構成されていた。この休息所が連日、常時満席であった。無料の湯茶用に紙コップを4000個用意したのだが、2日もたたないうちになくなってしまった。2000人以上が初日にこの湯茶を飲んだことになる。

休息している人に聞いたところ、本会議場内を含めてIGC全会場の中で、無料のお茶が飲めるのはこの休息所だけだということで、それが盛況の原因のようであった。ホテルの朝食のバイキング料理を包んでもってきて、ここでお茶を確保して昼食とするチャッカリ学者もふつうに見られた。会場にある食堂レストランの料金が、外国人からみれば高すぎることも、一つの理由であろう。

展示会の主催者としては、人が集まってくれること、サービスを喜んでくれることなど満足すべきで

あろうが、舞台裏では湯を湧かすことが間に合わず、セルスサービス用タンクのお茶がすぐなくなってしまった。アルバイトの女性がかかりっきりになっても間に合わない。また、タンク周辺に湯茶がこぼれて掃除をするのもたいへんなほどであった。

気がついてくれて、親切にお茶がぎれていることを通知してくれる人も多いが、ともかくも湯湧しが間に合わないので、どうすることもできない。たくさんの人に早く補給するようにと叱られた。

2) ポスター展示ボード

科学展示場には、横約20m、高さ2.5mのポスター展示用ボードを用意した。しかし、2日目の午前中でいっぱいとなり、もう張るスペースがない。そこで会場の2カ所にあった目かくし用パネルを使う破目になった。このボードは初期の計画段階では、考えられていなかったが、仮に設置していなかったとしたら問題となる場所であった。

3) 飛び入り展示希望者の扱い

開催中に科学展示場の片隅で小展示をしたいので、机やイスをかしてほしいという要望が少なからずあった。ポスター展示板の前で、パソコンなどを並べて展示したいというもの、机の上で標本展示をしたいというものなどいろいろある。

しかし、出展者が $3 \times 3 = 9 \text{ m}^2$ に約60万円を支払っていることとの比較を考えれば、許可することができない。ところが、相談にくる人は、「そういう条件で本国をでてきたので、何とかして欲しい」とねばる。おそらく出張旅費が出ているのであろう。そこで、 1 m^2 あたり $9/60 = 6.6$ 万円を支払ってもらって許可することにした。公共機関であれば、その1/4である。

何 m^2 必要かと聞くとすべてのものが 1 m^2 でよいという。実際には2~3 m^2 使ってしまうのだが、床面使用料としては 1 m^2 にしたいということである。これも、現場責任者としては予想していなかった小さなハプニングであった。

4) インフォメーション・デスク

科学展示場の入り口には、インフォメーション・デスクを置いた。筆者は展示会場開催中ほとんどそこにつめていたのだが、初日と2日目は、本会場へ行くべき人々がたくさんはいつてくる。国際会議場へバスで来るとバス停から歩いて最初の建物が展示場であり、そこにIGC会場という大看板が

かかっているためであろう。

となりのビル(本部)へ行ってもらうようにいうのだが、もう一度道路まで出て橋を渡っていくことを教えねばならない。外国人だから当然英語だが、英語のわからない人々も多い。そこでやむをえず案内する破目となる。そのたびにアルバイト要員が一人、二人と欠けていく。初日、2日目という忙しいときだったので精神的にこたえた。

5) 出展の取り消しと遅刻

開催日直前になって、出展の取り消しを通知してきたり、外国の出展者のなかに申し込み後何の連絡もないものが、ほんの少しではあるが存在した。

初日には、イランの地質調査所が到着していなかった。2ブースという広い空間が中央であいている。皇太子殿下の巡覧のときもあいたままであった。2日目に到着して、急に1ブースをキャンセルするという。キャンセルしても使用料は予約した通り2ブース通期を支払うことになる」と通告したが、「それは困る、支払うことができない」という。もちろんブース代金はこの時点には未納である。

こちらとしては、1ブースがあくだけではなく、そこをパネルでしめるには、少量ではあるが費用が必要である。その上通期で申し込んだのに半期でよいという。代金は別に交渉するとして現場サイドとしては、前期1ブース、後期2ブースを何とか埋めねばならない。そこであとでのべるように益富地学会館にお願いして、後期は標本を展示していただくことにした。

ロシア共和国のある会社であるが、出展申し込みが早い時期にIGC本部に届いていたのだが、その後全く音信不通のところは二社あった。

そのうち一社は開会前日に到着して、ブースが必要だという。もちろん予定されていたいなかった。そこ

で急にキャンセルになったところに入ってもらったが、会議の初日になっても荷物が届かないという。2日目になってやっと到着して、無事展示することができた。もう一社は、まったく連絡がないので、本部が会議に対する参加申し込みをキャンセルしたのとして取り扱ったところ「IGC展示委員会の参加取り消し処置のためにビザが取れなくなって訪日できない。商品を仕入れたのに売ることができなくなって、大損害である。責任をとれ。」というテレックスが会議開催後3日ほどして送られてきた。

6) 益富地学会館による標本展示

益富地学会館では、IGC社交プログラムのコースの目的地に決まったことを受けて、会館の英文説明書と主な標本の展示ケースを作成していた。

そこで、参加者の地学会館訪問の終わった会議の後半に、標本を科学展示会会場で展示していただくよう、お願いしておいた。

このお願いに対して益富地学会館からは、「無料で貸し出しをする」という解答をいただいていた。ところが前に述べたように、イラン地質調査所に予定されていた2ブースが、会議の後半にあいてしまった。そこで、この2ブースに益富地学会館所有の標本を展示していただいた。心良く筆者の要請にこたえていただいた益富地学会館、とくに館長の益富寿之助博士に感謝します。

以上、筆者の心に残った現場の風景と裏話を紹介したが、これ以外にも多くのの人々の協力に支えられて、科学展示会が成功したと思う。協力していただいた方々の感謝を表して、筆を置くことにする。

YOKOYAMA Takuo (1993): IGC Scientific Exhibition
—Some sketches at exhibition site—
